

ずいそう

レザークラフトと私

穴井秀和



私がレザークラフトを始めたのは2019年なので、まだ4年の経験しかない。あれこれとレザークラフトの蘊蓄うんちくをいえるほどわかってはいない。

始めたきっかけは、現場での安全大会の直会での出来事である。毎月1日に行う安全大会の夕方に、直会と称して現場職員を対象とした会食を事務所で行っていた。大きな現場だったので、50人程度での会食だ。現場代理人の発案により、その月の誕生日を迎える人にレザークラフトの小物をプレゼントすることになった。作るのは現場の職員で休日がつぶれるとぶつぶつ言いながら、キーホルダーやブックカバーなどの小物を作ってくれては毎月贈呈してくれていた。私はその時、手軽に手作りのプレゼントを贈ることができることに憧れた。元々、革製品が好きなので、自分用に材料費だけで作れることも魅力だ。女房や子供、そしてまだ見ぬ孫や親せきの子供など、退職後の余裕時間を使って丁寧に作れば、気軽に安く、プレゼントできるのではないかと思った。

でも、具体的にはどうすればいいかわからなかったので先の現場職員に教えてもらった。幸いにも道具をプレゼントしてくれたので、すぐに始めることができた。道具はセットでもバラでも買うことができる。初めは最小限でいいと思う。

さて、どういう手順で作るのか。まず作るものを決め、その型紙を手に入れる。初めはどうしていいかわからないから、作り方を教えてくれる本を買う。初心者向けの本は結構多く出版されており、作りたいものを探して本を購入する。それらの本には型紙の付録がついていて写真で作り方が解説されているので、その通りに作ればなんとなくできる。近頃ではYouTubeの利用も多いだろう。

革はどこで買うか？まず、すぐに探しやすいのはハンズのレザークラフトコーナーである。もっと色々な種類を探したいなら、東京だと浅草橋・蔵前付近に革を売っているお店が多く、探検するとハンズより安く買える。ネットで直接買うとさらに安く手に入るが、実物を手に取ることができないので、初心者は質感がつかめず、失敗する恐れがある。私もいまだに思っていたのと違うと感ずることがある。

次は型紙に合わせて革を切る。プロは革包丁を使うが、素人はカッターナイフでいい。カッターは刃を研がなくてもいいし、安い。ただし、安定して革を切ることができるように刃の厚いカッターの方がいい。今ではあまり見かけないが、昔の床屋さんは、髭剃りの刃を帯のような長い革で研磨していた。それほど革は固く、逆にいうと革を切る刃は傷みやすい。

革を切ったらそのままでもいいけど、表になる革(これをギンメンという)の切端(これをコバという)の角をヘリオトシで角をとり滑らかにする。機械図面の「C」にあたる。そして切断面のザラザラ感をなくすために仕上げ材を塗って、丸い木の棒でコバをこすって毛羽立ちをなくす。上級者はさらに染料で切断面を染め、定着材を塗って磨き上げる。この仕上げの出来で初心者かどうかを見分けることができる。

次に革を縫うのだが、手縫いの場合、まず革に穴をあけて縫う。縫い目がそろっているか否かがその作品の評価に大きく影響するので、手縫いの場合、この穴のあけ方がまっすぐで等間隔であるかが最も重要である。そのためには、デバイスのようなもので革のふちから等間隔になるように薄く線を引き、その線上に穴をあける。穴をあける道具は、菱目打ちといって穴をあける刃が2個や4個、等間隔でついている。この菱目打ちを革にあて木槌でたたいて革に穴をあける(写真-1)。

あとは、革用の糸を必要な長さに切り、その両端に針をつけ、二つの針を交互に穴に通して縫っていく。

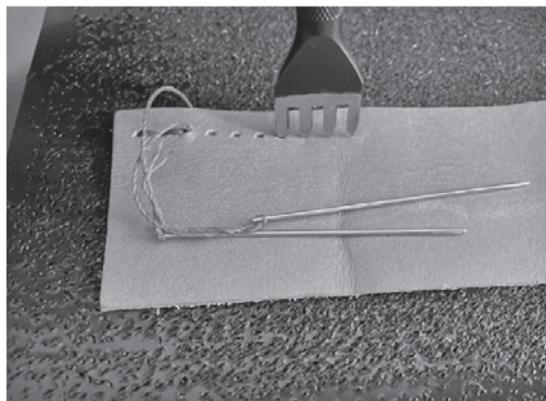


写真-1 穴あけと手縫い

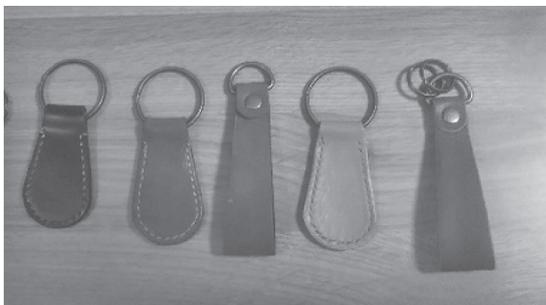
糸は麻糸に自分で蠟をつけたり、蠟付けした合成繊維の糸を使用する。縫っているときに糸が擦り切れるのを防止するために蠟付けした糸を使う。以上を基本として必要に応じてボタンやファスナーなどをつけたりする。

そうやって作ってきたものはどんなものか？

まず最初に作ったのはキーホルダー。写真—2のように様々な形、色のものがある。革の色だけではなく、縫う糸の色・太さ、取り付ける金具の大きさ・材質・色など自分が好きなようにバリエーションを楽しむ。

小物を作ることに飽きてきて写真—3のような鞆や手袋・手袋ホルダーまで段々作るようになってきた。機能上は支障ないけど、細かな部分にはほころびがあって、人にプレゼントできるようなものではない。やはり自分用の域を出ていない。

それでもくじけることなく、財布はもちろん、名刺入れ、メモ帳、眼鏡ケース、IDカード入れ、筆入れ、時計バンド、マウスパッドなど様々なものを作ってきた。振り返ると50種類くらいのアイテムを作っている。材料費だけでできるのもいいけど、一番の魅力は自分用にカスタマイズできるところがいい。同じ形のバッグにしても大きさや形、色など自分で選べる。そ



写真—2 キーホルダー達



写真—3 鞆、手袋・手袋ホルダー

して、バッグであれば内側のポケットの大きさ・形も自由に作ることができる。旅行用のバッグであれば、御朱印帳入れやコンパクトな絵の具入れなど、市販のバッグにはない注文をかなえることができる。困ることとすれば、先に述べたように革に縫い穴をあけるときの木槌を使うが、この時にたたく音がうるさいこと、時々使う染料で床や壁、テーブルなどを汚してしまうこと。だから、作業している周辺を汚さないように養生して慎重に、また夜は早めに切り上げて騒音の苦情がでないようにするなど、工事現場と同じように地域住民（家族）に気を配りながら、製作を続けている。

こうやって鍛錬を重ねて出来上がった最新作が写真—4の通勤用バッグである。これも作り方を指南してくれる本を買って、型紙通りに革を切り、記載された写真を参考にして丁寧に作り上げた。丁寧な作り方だったし、休日しか作業できないので、出来上がるまでに2、3か月かかった。

このように作品が増えてくると、周りの人の目に触れる機会も増えてくる。私がレザークラフトを行っていることを知っている人、知らない人、色々だ。知っている人は、「これもそうなの？」という感じで確認するようなことを言われる。それを横で聞いていて私が作ったことを初めて知った人は、大体驚く。買うわけではないので、手に取って確認することは少なく、一瞬の見た目にはよくできていると勘違いするのだと思う。そんな時に私が一番恐れていることは、「私にも作って！」と言われることである。昔からの知り合いのおばちゃんが言いそうなことだ。幸い、私の周りにはジェントルな人ばかりなので、そんな目にはあっていない。簡単なものなら作ってあげてもいいけど、それが他の人にも広がると面倒になる。

当然、家族も私が何を作ったのかよくわかっている。どんな材料、革を持っているかまで知っている。だか



写真—4 最新作

ら娘にこんな財布を作ってくれとスマホに写真を送り付けられた。そういう要望のものは、型紙も作り方を書いた本はないので、これまでの経験を頼りに想像しながら作る。そうするとやはり経験が足りていないので、なんとなくできるけど見栄えも悪い。娘はちょっと顔をきつらせながら「ありがとう」と受け取ってくれた。

そんな娘とのやり取りを見ているのか、娘から聞いているのか、我が家のおばちゃん（女房）は、「作ってあげようか？」とも言ってないのに、「私いないからね!!」と一方的に宣言された。まだまだ、修行の道は長い。

—あない ひでかず 鹿島建設株—

